

日付のある雑詠と随想

海蝶夢話 卷の九 二〇一四年

谷川  
修



海辺の砂浜でなにかしら構造物をこしらえている蟹は、波が打ち寄せてそれをくずしてもまた、そこから新たな形をつくり出そうとする。生き物とは、エントロピー増大の法則に抗して、ささやかでもそのような営みを為す者である。そして、個体はついには遺骸を残して消え果てるとしても、岸に打ち上げられた舟形の甲殻や大きな肋骨は、DNAに記号で記されたイカや鯨の意志の形見である。

人の身心もいつか働きを停止するときがやってきて、崩れ去る身は骨だけを残して、生きているとき活動していた精神は形もなく消える。人の場合には、その人を知っていた何人かの人の記憶にかすかにとどまり、消えた心のわずかな残滓が言葉で残されることがあるが、それらは堅固なものではない。依然として、生きるとはどういうことかという問いが残る。人間にできることは、そのあり方や意味を問い続けて生きることである。

海岸道路とテトラポッドで占領された海辺で暮らす蝶は、残して注意を引くほどの甲殻や肋骨を持たない。日暮しの中で漏れ出るつぶやきを書きとめるのが、せいっぱいの形見である。それは人の言の葉という無形の記号の体系に則っているつもりだけれど、それを読んでもくれる人がいるかは分からない。いや、読み解くほどのものでもない。こう言いながら毎年つづった『海蝶夢話』は巻の九になった。前の二つ『徐山猿声』と『秋水泡語』の例に倣って、九巻で区切りをつけるとしよう。

一月三日

細い毛糸を編んだように凧いだ海を、  
水鳥が、姿勢をくずさず平安に進む。

正月三日歩む人は、山際の道で椿を手折り、  
穏やかな内海をしみじみ喜ぶ。

夕暮れ、凜とした三日月が残りの円と在って、  
満ち足りた天の気が声もなく語る、

一切の生きとし生けるものは、幸せであれ。

一月五日

敬聴する『ブツダのことば』、冬の雷

一月七日

園丁は果樹を剪定、身を措定

果物がよく実るように果樹の剪定。陽を遮ってほかの果樹の成長を妨げ  
る古い木の高い枝も落とした。人もそのようであるたいもの。身に実体が  
ないことを知って。

一月九日

梅の木の再起を賭けて大手術カイガラムシに傷む五体の

意気示す夜警の鈴が雪を呼ぶ

一月十日 軒の雪落ちて金魚が仰天す

一月十六日 根を持たぬかよわい者が根茎を張り巡らした強者に対す

一月二十一日 雲水を真似る初心の頬に雪

一月二十五日 雷神と庶民の悲哀、無縁の縁

映画『寅さん』を観ていたら天雷が轟いた。劇中の雷鳴だったようにも、  
また、わたしがここで聞いたのだとも思う。

一月二十八日 春を呼ぶ雨に竹みなおじぎする

二月六日 焚火してただ火を燃やす術学ぶ

三時間半。こういうのを無心というのだ。

二月十五日

灯をともし四温の暮れを憩う船

ふきのとうの苦みをほめて日を終える

二月二十日

枯死逃れ蕾をつけた桜桃の一枝を挿し春さざす部屋

(幹を失った木)

二月二十四日

ポンカンで早贔乾き春來たる

(モズが幼い木に実の代わりのトカゲを)

三月五日

黄の花で素生を明かす蕪のトウ

雲分けて如月の舟進む空

三月十日

手の甲にレモンの棘が印するこの園丁の未熟を赤く

三月二十九日

ゆつくりとロシアの大地越えて行く巡礼の蝶額に印

三月三十日

オランダに羽根が三つの風車立つ

前日の夜に一刻節約し今日千金の春の夕暮れ

三月三十一日

春耕のオランダの野に白鳥しらとりが並び季節の巡り喜ぶ

四月一日

天井川に浮かびきらめく春の中

畏怖すべき天の配剤享けた人なお一隅で人間を問う

デン・ハーグの夕暮れ、スピノザ像がこちらを見つめる。

四月二日

晩鐘がまだ陽の下で鳴る蘭都

四月四日

「水巷春曉」

鐘声鳥歌蘭都曉

睡気未去臥狭床

異国巡礼雖勞身

爺孫意氣尚求行

四月五日

モンテニュー街道すでに藤の花巡礼の人励まされ行く

アキテーヌ、塔への道に野草咲き鳥のむくろもある春を行く

四月十日

桃李梨と林檎の花開く荒地を守る園丁アダム

四月十五日

祖父の姪の孫娘に当たる人が話に来た。年少の頃に祖母から聞いた話を思い出したという。それは、わたしの両親の結婚式のときに大きな盆を貸したが戻ってきていないという話だった。黒い漆塗りで脚付きの立派なものらしいが、ないだろうかというのである。二、三残っていた昔の什器を入れた箱を引っ張り出してみた。一つが該当するかもしれない。電話したらその人が見に来た。内側が朱に塗っており、黒い品だったという話とはくいちがう。わたしが、誰しもそういう気がかりはなかなか消していくものだから、持つて帰られませんかと言うと、いや大切になさいませと答えて帰られた。

ほこりをかぶった別の箱には嘉永の年号が記してある。昔の生活を彩っただろう什器はみな、修復しなければ使えないほど不具合が生じている。祖父の生まれは慶応年間。父はその四十年代後半の子だが、結婚は八十年近く前のこと。その親戚の人はわたしよりも年長で、盆の話を開

いたのは六十年以上前のことだろう。過去の霞の中から春の夢のような想い出がよみがえって、ほのぼのと興をそそるひと時を生んだ。

舍利殿もこの身も照らす春の月

四月十六日

果菜園荒地に紫蘭植えて待つ草木にぎわう豊穡な地を

四月十八日

歌習う鳥聞きわらび摘む伯夷

四月二十四日

強磁場とエックス線を浴びた脳太陽光の慈愛を愛す

四月二十五日

飛ぶボラをわかめむすびを食べて見る

五月四日

龍宮の潮吹きを待つ崖の上

(恐る恐る)

五月七日

足焼いて瓦を直し高見する

五月十三日

バラ散らす風去り磁針微動せず

(昨日、野菜や果樹が傷ついた)

五月二十二日

川渡り柿の梢で光る風

卯の花の茂みから出て猿過る

五月二十五日

タブレット開き木蔭に憩う人おもむろに去る自転車を押し

六月四日

蟻螂が塀から生まれ草探す

六月五日

人間の脳も短絡五月闇

何者か夜行する音聞き分けてわたしを試す人と対座す

六月八日

わが海で鱧釣る人の籠覗く

六月九日

パンとコーヒーで精進。畑に出て西瓜を受粉させようとしたが、今日も

曇天で雌花は開いていない。歌を習熟した鳥が鳴く。

鶯の美声が蜜柑玉と為す

六月十日

一輪のコスモス可憐丈二寸

(果敢な一生。小鉢に移植し食卓に置く)

六月十三日

柿一つ残して摘果、わたくしも身を整序する、来季を期して

六月十四日

寺の堂宗祖寿ぐ誕生会十大弟子は餅拾う子ら

六月二十二日

鷺遊び田園という言葉成る

六月二十四日

野の花を揺らして擬態鳥の母

刈り残す母鳥守る草の城

七月一日

くちなしの香りでこの身燻蒸す

七月二日

大雨を予期して暮れる海静か旅想い出し安吾の修行

七月六日

山口美術館で「大浮世絵展」を観る。チケットに「国際浮世絵学会創立五〇周年記念」とある。学会があるのだ。ロンドン・ベルリン・ボストンの博物館・美術館からも出品している。

雨浸みる靴で眺める赤い富士

(通称赤富士 || 凱風快晴)

わが池に陶器の青魚せいぎよ解き放つ

(骨董市で百円の浮き球)

七月九日

遠くから強風送る台風を見者の月が雲通し見る

七月十一日

クチナシの香りに月が入る書斎

七月十三日

剪定を終えて甘露の氷水

七月十五日

船虫を踏まないように波止歩きイカとカニとのほうびをもらう

ここにもコミュニティがあることを教わる。味わい深い夕食だった。

七月十七日

輪舞して空へと上がる蝶二匹長かった雨期終わらせるため

作物の成否に一喜一憂しわが人生と比較している

七月二十二日

ガザの地にまた砲火降り命散る

わたしは生まれて以来、平安な世に生きているのではない。

七月二十五日

「暑を払う賦」

縁戚の東都の兄が『神品至宝』の書冊一つ下さる、すなわち台北故宫博物院特別展のための図鑑なり、秋の太宰府博物館での観覧に備えよとの好意から、わたしは初めて図録を予習するという機縁を得た。

朝は果菜に水を遣り、  
晩にページをめくるうち、

ニュースが最高気温三十九度と報じた日、  
行書黄州寒食詩巻に出会った。

書は必ずしも流麗・温順ではなく、  
むしろしなやかだが強い精神を表わす、  
わたしは思う、コラムが語る詩巻の数奇な運命は、  
実はその強靱さこそがもたらしたのだ、と。  
感激し、暑気を忘れ、来歴をたどる。

清の乾隆神品と愛蔵せしに、  
円明園は英仏軍これを焼く、  
僥倖まさしく神品を略取し、  
至宝ひとたび巷間に休息す。

万金に値する詩巻は数家の手を巡り、  
遠く流浪して扶桑の樹の下に寄せて、  
好事家はまことに帝よりも大事にし、  
危急にも救うべく蔵の中央に置いた。

関東を襲ったマグニチュード七・九の地震は、  
十万余人の命を奪ったが、神品をこぼたなかった、  
また扶桑を焼いた空襲も、紙巻を燃やすことはできない、  
詩の書は、ついに安住の場所「故宮」博物院に戻ることができた。  
敬愛する蘇軾と書とが対峙した運命に心を動かされ、  
わたしは、『蘇東坡詩選』を手にとって、読み、思索する、  
誹謗に死をも覚悟したが、かろうじて黄州に流され、  
東の荒れた丘を耕す身過ぎに、長雨は寒食の日を忘れさせる、  
詩句はしんみりと傷心の調子を帯びているけれども、  
当代きつての知性にあらゆる思いが去来しなかったはずはなく、  
落ちついた表白の奥から清雅な理性がにじみ出る、  
この詩で理と知はほとんど最深を探り当てようとし、  
それを自覚しつつ筆を下して成った書は、到達を示す、  
こうして自己と世界とを見つめる暮らしの中から、  
ついに自在な心境の高みにある詩人が立ち現われた。  
「黄州寒食詩卷」はどのような境遇をも凌ぐことができる。

わたしは、盛夏の夜にその詩と書との慈光を浴びて、  
涼やかな精神を授かり、わずかに力も湧いて来た、  
明日の朝は、今宵炊いて冷えた飯を食べ、  
西の荒地の野菜と果樹に水を遣りに行こう。

七月三十一日

網戸這い酷暑を凌ぐ蝉鳴かず

(願望は果されなかった)

八月二日

滝しぶき浴びて能古志賀見はるかす

八月九日

虹見上げ夕の挨拶嵐待つ

(見たことのないほど高い虹)

八月十日

皇帝の筆跡勁し野分あと

八月十一日

長雨の夏におろおる林檎が落ちる

八月十三日

初秋の海へ出漁する漁父が並ぶ鷗と夕べの祈り

八月十四日

鬼百合の花が水に身を投じたあとに、

蜻蛉が静かにとまっている、

夏が秋に移っても雨と曇天が終わらない、

熊蟬が貴重な時を惜しんで鳴くのに合わせて、

わたしはひとしきり思いを巡らす、

天候は年ごとに変わり、早の次の年には日を隠す、

蜻蛉も蟬も人も年ごとに新しい日をつくる、

秋風が伸びた茎を揺らすのに蜻蛉ははまだ思索中、

見回れば、林檎が一つ、梨が一つ、まだ枝にあり、希望を保つ

図録『神品至宝』をめくっていたら、南宋の帳即之という人の書の解説に、五十一歳のときに人に陥れられて退官し、八十一歳の長寿を全うするまで山水を愛でて暮らした、とあった。八十まで生きれば長寿だと気づかされて、はっとし、手ずから植えた果樹が成長して何年かほぼ満足するほど収穫できたら、もって瞑すべしだと悟った。

八月十五日

雨続く盆に寒食、尼僧から外と内との沈黙学ぶ（尼僧はA・ヘプバーン）

八月二十二日

日中晴れ間に恵まれて、孫が、ペットボトル一杯の海水を鍋で煮つめて塩を得た。各地が被災した今年の長雨を氣象庁が八月豪雨と命名。

潮を焼き塩屋の子孫塩を得て天地始めて秋氣満ちる夜

八月二十六日

天と地の成果無花果の花床食う

八月三十一日

親戚の法事でまた木魚と念仏の唱和を聞く。今日の話題は寺の由来。——創建は鯨組のあつた通浦から僧を招いて堂を建てたことに始まる。その時代ここ大日比には三十数戸しかなかったそうだ。通浦でもここでも、寺の建立資金は有力者が出した。それだけではなく、そういう家から出家する者も出て寺の発展に尽くしたという。話の出どころは、寺とこの浦の長の家に残されていた代々の文書である。話は、漁村にとつて重大事だった網代のことにも及ぶ。通浦は湾口にあつて、回遊してくる鯨をいち早く見つけて進路に網を張り、集落の近くに追いかんで最も多く獲ったのだが、湾口にある小島を迂回したりして湾の奥に入った鯨は、瀬戸崎浦や白潟浦が獲るのを許されたい。漁場の割り振りは、ほかの漁と関連付けられていたのだろう。先考の話だと白潟浦は、やはり回遊してくる鮪を捕獲するのに適した奥深い入り江を

網代としたらしい。戸数の少ない大日比は瀬戸崎との網代のいざごに不利だったらしく、死  
 人が出たという記録もあるという。鯨の回向のために法会を開く浦々の信心深い人々も、生活  
 にかかわることでは一所懸命になったのである。——この湾に支えられて暮らした人々の何代  
 もあとの縁者は、興味深く話を聴いた。

陽が戻り八月送る木魚鳴る

九月四日

黒蝶が舞いのおさらい秋の海

(午前大雨、夕方海は鏡のよう)

白と青の秋鷺の影映す海

九月八日

名月が月仰ぐ族嘉納する才は乏しく拙なる者を

九月十六日

朝風にピアノを聴いて萩揺れる陽はやわらかく哀調を解く

九月三十日

柗の花にたじろぎ歳をとる

(いつのまにかよ九月が尽きた)

十月一日  
コスモスの花からすーっとクモ降りる

十月八日  
太公望海照らす月釣り上げる

地が隠す月あかがねで円満たす

天空快晴、大地食月、月猶円満、秋星満天。

十月十日  
秋桜瑞穂の国の田に植えて悲哀の混じる収穫の時

秋日和まだ奮闘の農夫あり

十月十八日  
ノクターン響き深まる海の青アオサギめざせ煙立つ岸  
(朝食の時)

十月二十日  
凧ぐ海に朝のお祈り、天地ことほぐ

十月二十一日  
BS放送の旅番組「街歩き」をしばらく観ていたら、小犬を二匹連れて

散歩していた老人が、「人生を愛することだ。別に偉い人である必要はな

い。分をわきまえて生きるんだ」と言った。世界の街角のどこにでもこのように確かな哲学をもって生きている人がいる、と思わなければならない。老人が連れていた二匹の小犬は捨てられていたのだという。

秋雨を戸口から出さず眺める日

十月二十五日

アーモンド植えて衰亡くいとめる

身の衰えに抵抗するための作業。電子辞書でスペルを調べたら、「英和」の方に、「希望」や「豊穰」を象徴、花言葉は「愚・無分別」とあった。相反する言葉にとまどってインターネットで調べたら、花が前者を、果実が後者を象徴するというのがある。たしか中国で、同種の桃は豊穰を象徴してめでたい。人のかつてな意味付けのなんと多様なこと！。とここで、Wikipediaは、食べれば効用が多いと言う。ビタミンEが多く、体細胞の酸化を防ぎ老化を予防し、悪玉コレステロールを酸化させない…などと。こちらは当てずっぽうなわたしの意味付けを支持するので、信じることにした。ここで、もう一つの意味「愚」が成立するのも知れない。

十月三十日

天高しカミキリムシと戦する

十一月四日

つわぶきの花はなやかに花言葉

片言の英語でやりくりしている者が、五日がかりで『ハムレット』原典を読んだ。分ち書きの行が語句のつながりを屈折させ、詩のように言葉の踊る文、しかも古文を、読み解こうとしたのである。文意を汲むのにはとんど一語一語辞書を引くことになる。ところがすべての語意を列挙する電子辞書が、解説の困難を増しさえする。少しはなじみの単語さえ、その文でどんな意味を担っているのか問いが生じて、辞書に当たるとそれが多義的であると知る。簡潔な単語の並びで豊かな内容を表現している文章を、日本語の表現に組み立て直して理解しようとする方法の無力なこと。暗中模索で進む。とにかく言葉があふれて、何かしら思索をひき起こす。シェイクスピアの言葉がじっくり出す世界はとても深いことだけは感じる。そういう曖昧模糊な理解のままに、物語の見事な展開がわたしをぐいぐい先へと引きずっていった。

本の扉に「シェイクスピア生誕地で購入」という書店のシールが、裏表紙には三・五ポンドと書いた値段シールが貼つてある。家族でイギリスに滞在して以来三十年間、この本は書棚に眠っていたのである。最後のクライマックスを登りつめて少し高揚したわたしは、「『ハムレット』を読み終わった、ストラトフォード・アポン・エイヴオンに行ったとき買った本だよ。

世界最高の戯曲だ！」と叫んでいた。

十一月五日

分け入ってヤマドリに会う柿紅葉

新そばを味わい森の快気吸う

(明日退院する人と)

十一月九日―十一日

越前・加賀・能登の旅

人止めた安宅の関の海広し

時雨見て甘酒に酔う東茶屋

渤海の波が穿った能登二見

那谷寺の紅葉に染まる風と岩

法堂で行儀を習う入門者青い頭で足早の所作

(永平寺で)

なまじいの者は入門許されぬ山門の下公案解けず

十一月十八日 偽りの言葉あふれる、この国は「オセアニア」かともまどうほどに

十一月二十二日 湯治場の山のグラウンド、ラグビーで母校のチーム花園逃す

十一月二十九日 絵はがきの草堂の門の脇の花器、水仙に添え残菊を挿す

闘病の人を手伝い、昨夜、平均余命の表を見て自分のことを考えた。

十二月三日 イランにもけなげな少女十五歳古い文化を受けて新たに (映画鑑賞)

十二月七日 軍ならぬ釣り舟暮れの壇の浦

指針無く漂う国の総選挙太公望も不在のままに

十二月十一日 娘が病状を告知するのを父がしっかりと受けとめて、娘と妻に声をかける場に

立ち会った。さらに贅言を用いるべからず…

十二月十三日

「選挙ではバカタレと書け、審査では×印書け」と、世を憂う僧

八十七歳、親鸞の教えを説く。投票日前日、総理大臣の選挙区の寺で。

十二月十八日

雪まじる寒風に舞う一沙鷗

十二月十九日

歳末を乗り合いバスがひた走るヘルシーランド経て壺園へ

十二月二十一日

岸に来て青鷺が問う、わたくしのこの一年に大過ないかと

小雪舞う玉ねぎ畑草を抜く無事に冬至を越えるつもりで

十二月二十二日

袖もいで指に割礼日と月が再生を為す朔旦冬至（太陰曆十一月朔日）

十二月二十四日

降誕祭きらめき走る救急車眺める者はまだ人見舞う

十二月二十五日

四日月の光を頼り大根だいこん抜く

十二月二十六日 酔っぱらいよろめき走る自動車のうしろで正気保つ年の瀬

十二月二十八日 通浦で追憶をかう暮れの市

昔鯨を獲っていた機縁で今でも通では鯨肉を売っている。先日、市西部の定置網にミンククジラがかかって、人々に伝え聞く追憶を呼び起こした。大きな鯨を食べるのは豊穡を願う昔の縁起かつぎ。

十二月三十日 語りかけ母養生こひじょう小晦

沈潜し海鵜は独り年を越す

暮れに人と話していて、経済不振の状況下それぞれの家族が苦しい選択を迫られている三つの事例を聞いた。みな曲がりなりにも事業を営んでいた家である。総理大臣の選挙区でその言葉の空しさが露呈している。年を越すにも困っている人がいることだろう。坂を下るように世の中が変化している。今年十二月の総選挙は、この国が引き返せない地点を過ぎることを確認した、政治・経済上の重大な選択だった、と蝶は思う。十年しないうちにひどい事態になるだろう。詠嘆するしか能のない蝶はたいへんもどかしい。ただ、老衰しても正気を保ちたいと考えて、気をつけている……

二〇一五年 正月  
白江庵 謹製



『人生処方詩集』 E・ケストナー

その断片を恣意的に切りとる

理想をもつ人間は

それに到達しないように 用心せよ

さもないと いつか 彼は

自分自身に似るかわりに 他人に似るだろう

……

運命は きょう ぼくを張りとばしたように

さらに 幾たびか ぼくを張りとばすだろう

艱難なんじを玉にす というのは

ひよつとすると ほんとうだろうか

まだまだ うんと 張りとばされなきやならない

……

ひとは いったい ほんとうに ただ

歲月のように過ぎ去るためにだけ

うまれたのだろうか

